

【報告】

「聞き書き」を受けた高齢者による臨地実習の主観的評価

大津美香*¹ 黒坂菜美*² 菅原育美*³ 須藤那月*⁴ 北嶋結*¹ 米内山千賀子*¹
山田基矢*¹ 井上信子*⁵ 新保尚子*⁵ 木立るり子*¹

(2019年4月16日受付, 2019年7月10日受理)

要旨: 本研究の目的は、「聞き書き」を受けた高齢者が主観的に実習の評価を行い、その評価結果から今後の臨地実習の質改善に向けての示唆を得ることであった。高齢者16名を実習時期によって4つのグループに分け、グループインタビューを行った。発言内容はテキスト化し逐語録を作成し、カテゴリーに分類した。「聞き書き」の実施では学生から【積極的に話してほしかった】【事前に質問内容を教えてほしい】、作成した冊子では【読みやすく冊子を作成してほしい】【内容が不十分であった】【冊子の内容を事前に確認させてほしい】と要望があり、改善が必要な点もあった。しかし、【話しやすく、楽しかった】【様々話し良い機会になった】【読んだり見せたりして繰り返し活用している】【大事にしている】等、実習対象の当事者である高齢者から一定の評価を得ることができた。また、認知症予防や老年期の発達課題を達成するためにも有意義なものと考えられた。

キーワード: 聞き書き, 当事者, 主観的評価, 看護学生, 実習

I. はじめに

看護の質評価は医療の質を高めるために必要であり、利用者満足度はアウトカム指標の1つとして看護の質評価において用いられている。看護の質評価はケアの受け手である患者の視点¹⁾³⁾と看護師自身の自己評価^{1,3)}の二側面から評価が行われている。一方、認知機能の低下した患者の看護の評価⁴⁾⁶⁾や摂食・嚥下障害看護の質評価⁷⁾等のように、医療依存度が高く、合併症等のリスクが高い患者を対象にした看護ケアの質評価については、看護師の自己評価に加えて、患者に生じるリスクの予防に関連する客観的指標がアウトカムとして用いられ、患者の視点から評価が行われることはほとんどない現況にある。また、認知症の人の主観的評価については、本人の思いが正しく表出されているのか、信頼性の検討が必要である⁸⁾とされ、認知症の人の自己決定の表出は難しい状況があると考えられた。しかし、渡辺らは施設入所中の中等度・重度の認知症高齢者に食事や更衣などの日常生活行動に関する選択肢を提示する介入を行い、自己決定の機会を提供すると、8日目以降に選択の意思を明確に示して行動することができていたと報告している^{9,10)}。また、増田らは、施設入所中の軽度から中等度の認知症高齢者に写真療法を毎週1回、全8回実施したことが、自己表現、自己決定、人生の振り返り、自己肯定感を生む等の機会となっていた¹¹⁾と報告し、繰り返し看護介

入を行うことにより、利用者の視点から評価を得ることが可能になると考えられた。

看護ケアの質改善については、自己評価で行った評価結果と第三者評価で行った評価結果では、自己評価結果のほうがより高い評価値が出る¹²⁾とされ、回答可能な利用者からは当事者の視点から評価を行い、看護の質を高めていくことは重要であると考えられる。当事者の意見を取り入れたケアの質評価に関連する先行研究については、精神科病院に入院中の患者に満足度調査を行い、安らげる環境作りの取り組みを行った研究¹³⁾、精神障がい者の防災手帳に関する意見を基に、当事者自らも参加して防災手帳を作成した研究¹⁴⁾、当事者からの評価を得て急性期性暴力被害者のための情報提供用ハンドブックを作成した研究¹⁵⁾等がある。患者満足度や利用者による看護ケアの評価の実施に留まらず、当事者の意見を取り入れて、ニーズに沿った質の高いケアを提供していくことが求められている。

一方、看護学生の臨地実習の評価については、高齢者への「聞き書き」を実施して得られた学生の学び¹⁶⁾やアクティビティケアを認知症高齢者に実施して得られた学生の学び¹⁷⁾等、実習履修者である学生の学びや意見が評価指標として用いられ、教育的効果の検証が行われている。また、老年看護学実習にフィジカルアセスメントを導入した研究では、フィジカルアセスメントを受けた高齢者ではなく、実施した学生の学びとして自己評価が効果検証の指標とし

*1 弘前大学大学院保健学研究科

Hirosaki University Graduate School of Health Sciences
〒036-8564 青森県弘前市本町 66-1 TEL:0172-33-5111
66-1, Honcho, Hirosaki-shi, Aomori, 036-8564, Japan
Correspondence Author h_otsu@hirosaki-u.ac.jp

*2 八戸市立市民病院 Hachinohe City Hospital
〒031-8555 青森県八戸市田向三丁目1番1号 TEL: 0178-72-5111
3-1-1, Tamukai, Hachinohe-shi, Aomori, 031-8555, Japan

*3 岩手県立中央病院 Iwate Prefectural Central Hospital

〒020-0066 岩手県盛岡市上田1丁目4-1 TEL: 019-653-1151
1-4-1, Ueda, Morioka-shi, Iwate, 020-0066, Japan

*4 弘前大学医学部附属病院 Hirosaki University Hospital
〒036-8563 青森県弘前市本町 53 TEL: 0172-33-5111
53, Hirosaki-shi, Aomori, 036-8563, Japan

*5 鱈ヶ沢町役場 Ajigasawa Town
〒038-2792 青森県西津軽郡鱈ヶ沢町大字本町 209 番地 2
TEL: 0173-72-2111
209-2, Honcho, Ajigasawa-machi, Nishitsugaru-gun, Aomori, 038-2792, Japan

て用いられ¹⁸⁾、実習を受けた当事者の自己評価を基に臨地実習の評価を行った研究はほとんどない。精神障害者社会復帰施設を利用する当事者が看護学実習に参加することの意味を明らかにすることを目的に行われた研究では、当事者にとって自分のもてる能力や思い、看護学生への期待や抱えている苦悩を伝える機会となっていた¹⁹⁾。看護ケアの質改善については、自己評価結果ではより高い評価値が出る¹²⁾とされ、臨床実習においても、学生が実施した看護ケアを評価するためには、実習を受けた対象者の視点から評価を得ることが大事になる。

「聞き書き」は高齢者が語りを通して人生を回顧するものであり、「聞き書き」の終了後には聞き手によって高齢者が歩んできた時代の風土や文化も含めた個々の人生の語りを残す貴重な冊子が作成される²⁰⁾。そして、高齢者は冊子を用いることで自らによって繰り返し人生を振り返る機会を得ることが可能となる。回想法と類似した効果が認められ、認知機能の低下した高齢患者においても、「聞き書き」によってストレスが緩和され精神面の安定に効果がみられている²¹⁾。看護学生の臨地実習においても、「聞き書き」はコミュニケーション技術に関する看護ケアとして用いられ、看護学生にとっても高齢者理解に関する効果が認められている¹⁶⁾。

本研究では、看護ケアの一つとして、学生が「聞き書き」を用いた実習を行った。「聞き書き」を受けた当事者である高齢者が主観的に実習の評価を行い、その評価結果から今後の臨地実習の質改善に向けての示唆を得ることが目的である。

II. 研究方法

1. 対象者

2015～2017年度に介護老人福祉施設、介護老人保健施設、通所介護、通所リハビリテーション、サービス付高齢者住宅、介護予防一次予防事業のいずれかの実習場所において、老年看護学実習I（1単位45時間）を履修したA大学の看護学専攻2年次学生240名（1年につき80名）が「聞き書き」を行った高齢者のうち、介護予防一次予防事業に参加し、本研究への参加に同意が得られ、認知症の診断や要介護認定を受けていない高齢者16名が対象となった。本研究ではグループインタビューを行うため、馴染みのある仲間同士である一般高齢者を選定し、対象者は同じ地域で暮らし、週に一度、介護予防一次予防事業に参加し馴染みのある女性の仲間同士となった。

2. 実施方法・内容

(1) 研究方法及び内容

各年度の実習対象者を年度ごとに1～2グループに分けて、1グループ3～5名として、グループインタビューを行った。実施時間は約1時間とした。対象者の発言内容は、事前に同意を得たうえで、ICレコーダーへ録音した。

インタビューガイドを作成し、内容は、①学生の実習を受け入れたときの気持ち、②世代の違う人から「聞き書き」を受けたことに対する感じ方、③冊子の活用状況、④冊子に対する意見、⑤学生に対してや「聞き書き」に対する要望、⑥「聞き書き」が高齢者に与える効果とした。各グループにファシリテーターを2～3名配置し、インタビューガイドに基づいて、調査を行った。

(2) 実施期間

「聞き書き」は冊子の活用状況を含めて調査するため、実習が終了し冊子を提供後、3～4ヵ月後に計画した。2015年度の実習の対象者には2016年2月に、2016年度の実習の対象者には2017年2月に、そして、2017年度の実習の対象者には2018年2月に実施した。

3. 分析方法

ICレコーダーに録音した内容はテキスト化し逐語録を作成した。インタビューガイド①～⑥に関連する内容を抽出し、一つの意味内容が含まれる単位に区切った。そして、発言の意図や文脈の意味に注意を払ったうえでカテゴリー化した。結果の妥当性を高めるため、分析は複数のファシリテーター間において実施した。カテゴリーは【 】, サブカテゴリーは< >, コードは「 」で表記する。

4. 倫理的配慮

対象者には、臨地実習指導者を通して研究概要の説明を依頼し、内諾が得られた後、本研究の目的、方法、個人情報保護、研究参加の任意性、参加の可否により事業の参加に際して不利益が生じることはないこと、研究発表時のプライバシー保護、データの保存・使用期間、研究終了後のデータの破棄方法等の内容について、文書および口頭にて説明を行い、自由意思の下、同意を得た。また、本研究は研究者の所属する組織の倫理委員会において承認を得て実施した（承認番号2015-045）。

III. 結果

1. 参加者の概要

対象となった高齢者の概要を表1に示す。対象者は16名であり、全員女性であった。75～93歳までの後期高齢者であり、平均年齢は83.3±5.3歳であった。全員、認知症の診断と要介護認定は受けていなかった。

2. 学生の実習を受け入れたときの気持ち

表2に学生の実習を受け入れたときの気持ちを示す。19のコードが得られ、10のサブカテゴリー、3のカテゴリーに分類された。カテゴリーはコード数が多い順に【ポジティブな気持ち】【驚きの気持ち】【ネガティブな気持ち】で

あった。

表1 対象高齢者の概要

対象者	性別	年齢	グループ	インタビュー実施日程
1	女性	89歳	1	2016年2月
2	女性	82歳		
3	女性	93歳		
4	女性	88歳		
5	女性	81歳	2	2016年2月
6	女性	84歳		
7	女性	83歳		
8	女性	85歳		
9	女性	75歳	3	2017年2月
10	女性	81歳		
11	女性	91歳		
12	女性	75歳		
13	女性	79歳	4	2018年2月
14	女性	80歳		
15	女性	79歳		
16	女性	87歳		

表2 学生の実習を受け入れたときの気持ち

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
ポジティブな気持ち	緊張しなかった	別に緊張しなかった
		自分の中にあっただけだから緊張しなかった
		なんてことなく、ただ話しただけだった
		孫と話す感じだから緊張しなかった
	親しみを感じた	昔の職業(看護職)だということもあり、親しみを感じながらインタビューを受けられると思った
		地元出身の学生がいたことで、親しみを感じていた
	楽しかった	自分のことを話すから、楽しんで話ができると思った 楽しみで、ワクワクしていた
	よい機会になる	自分のことを小さい時から思い返すのは、そうないことだから、いい機会と思った
		戦後のこととか、なかなか話す機会はないと思った
	嬉しかった	嬉しかった
	いろいろ話したい	ウキウキして、いろんなことをしゃべりたいと思った
	経験者からの情報から不安はなかった	去年実習を受けた人の冊子をみせてもらい、聞かれることが何となくわかったから、不安ではなかった
驚きの気持ち	想像していなかった	まさか自分が対象になるとは思わなかった
		対象になるなんて思っていなかったから、えーって感じた 自分のことが冊子になるとは思わなかった
ネガティブな気持ち	経験がないことによる不安があった	どういことを聞かれるのかちょっと不安だった
		大学に行っていないし、大学生と話したことがなかったので不安はあった
	緊張した	緊張した

3. 世代の違う人から「聞き書き」を受けたことに対する感じ方

表3に世代の違う人から「聞き書き」を受けたことに対する感じ方を示す。25のコードが得られ、14のサブカテゴリ、5のカテゴリに分類された。カテゴリはコード数が多い順に【話せてよかった】【緊張しなかった】【性別、年齢、世代は関係ない】【気になることはあった】【嫌でなかった】であった。

表3 世代の違う人から「聞き書き」を受けたことに対する感じ方

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
話せてよかった	自分の昔話を聞いてもらって懐かしよかった	学生が話してくれるのが嬉しかった
		大学生が来てくれたおかげで、昔のことを思い出して懐かしかった
		普段話す内容ではないが、話すいいきっかけになった
		聞かれたことに答えていくうちに昔の話がたくさん出てきた
	楽しかった	自分たちの若い時の話を若い人にして、その話を聞いてくれてよかった
		家にいれば年寄りしかいないから、若い人と話するのが楽しかった
		若い人と話するのが楽しかった
		緊張もしたが楽しかった
	ありのまま好きなように話した	聞かれたことに対して好きなように答えた
		ありのまま話した
		言いたいことを何でも言った
	2回目のほうがよかった	2回目の方がより楽な気持ちで話せた
2回目の方がある程度中身を知っているから、2人とも慣れたような感じで話を聞いてよかった		
すべてを話さなくてよかった	言いたくないことは話さなくてよかったので、よかった	
緊張しなかった	孫と同じ感覚で緊張しなかった	孫が大学生だから孫と話すような感覚で緊張しなかった
		女子学生ならまた違ったかもしれないが、孫と同じ男子の学生なので緊張しなかった
	緊張しなかった	緊張しなかった
2対1でよかった	学生対1だと緊張してしまうため、2人一緒でよかった	
性別、年齢、世代は関係ない	性別は関係ない	性別はどちらでも関係ない
		男の子が来てくれてもどちらでも面白い
		世代も関係なかった
気になることはあった	年齢は関係なかった	世代が違っても何も関係なかった
		年齢は関係なく、何とも思わなかった
嫌でなかった	録音が気になった	何を聞かれるかわからないところがあった
		ICレコーダーが気がかりなところもあった
	嫌でなかった	嫌だという気持ちはなかった

4. 冊子の活用状況

表4に冊子の活用状況を示す。30のコードが得られ、5のサブカテゴリ、2のカテゴリに分類された。カテゴリはコード数が多い順に【読んだり見せたりして繰り返し活用している】【大事にしている】であった。

表4 冊子の活用状況

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
読んだり見せたりして繰り返し活用している	目につくところに保管して読んでいる	毎日裁縫をしており、その裁縫道具が入っている引き出しの中にある
		健康診断の結果と一緒にしており、どちらかが目についたときに両方見ている
		目に入ったときに見ている
		居間に置いていつでも見られるようにしている
		自分の寝る場所に置いている
		タンスの引き出しに入れている
		タンスの引き出しにしまわないと、忘れてしまう
		忘れないよう引き出しの書類を入れるところに入れてある
		出かける時にいつも見えるよう電話帳のところに置いている
		お返しとか、お悔やみとかの時に見られるから、そういうところに置いている
	健康診断とかの書類と同じよう必要時見られるよう閉まっておく	
	書類と一緒にしまっている	
	読んでいる	何回も読んでいる
		毎日は見ないけど、気が向いたときに見ている
		退屈なときに見ている
		1日おきとか2日おきで見ている
		見なくなれば1週間も見ないときもある
	1-2回見た	
	家族に見せる	夫も見ている
		孫が来たら孫にも見せようと思っていた
旦那には見せていないが娘には見せている。笑っていた		
子どもたちに見せている		
娘とか孫とかに見せている		
恥ずかしいけれど、人に見せている		
自分だけを見る	周りに誰もいないから1人で見るときもある	
	家族と冊子の内容のようなことについて話したことがないため見せていない	
	誰にも見せない	
娘たちには捨てられるといけないので見せない		
大事にしている	大事にしている	宝物だからタンスの引き出しに入れている
		誰にも見せずにとってある

5. 冊子に対する意見

表5に冊子の活用状況を示す。37のコードが得られ、14のサブカテゴリー、5のカテゴリーに分類された。カテゴリーはコード数が多い順に【内容が良かった】【読みやすく冊子を作成してほしい】【他者にも見せられ、繰り返し見たい】【内容が不十分であった】【宝物にしている】であった。

6. 学生に対してや「聞き書き」に対する要望

表6に学生に対してや「聞き書き」に対する要望を示す。30のコードが得られ、17のサブカテゴリー、8のカテゴリーに分類された。カテゴリーはコード数が多い順に【話しやすく、楽しかった】【様々話し良い機会になった】【冊子の内容を事前に確認させてほしい】【積極的に話してほしい】

かった】【学生に対して不満はない】【時間配分や内容が適切であった】【冊子を見ると思い出す】【事前に質問内容を教えてほしい】であった。

表5 冊子に対する意見

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
内容が良かった	よく書いてあると思った	話したことが全部書かれていて、よく書かれていた
		職業としてはその時代が一番良かった。緊張しながら仕事をしたということがうまく書かれていた
		載せてほしかった内容は全部入っていた
		自分勝手なことばかり話したが、うまくまとめてくれた
		話した通りよく書かれていた
		細かいところまでよく書いてくれた
	しゃべったのを上手にまとめてくれていた	
	最後の締めくりみいたところ、ちゃんと書いてくれていた	
	楽しい内容でよかった	楽しかった思い出が入っていたのがよかった
	おもしろく、嬉しい内容だった	
戦争など残酷な内容がなくてよかった	戦争のことは書かないほうがよいと思う(戦争のことは書かれていなくてよかった)	
	戦争経験者であり、戦争は嫌だと強調したら、意図的に戦争のことは書かれておらずよかった	
残酷なものは今でもあまり見たくないの、よかった		
学生の写真や名前を載せるのはよかった	写真がついているのはよかった	
	名前を忘れてしまっているので、載せてあるのはよかった	
名前と顔が一致しないため、写真のところに名前を書いておけばよかった		
写真があるほうが、文面だけよりも思い出しやすい		
個人情報保護された	生活のことで、秘密にしたいことをしゃべったが、載らなかった	
	家族構成のことを聞かれ、言わないと話にならないなと思ってしゃべったが、書かなくてよかった	
読みやすく冊子を作成してほしい	津軽弁を多用しすぎず、標準語も用いて書いてほしかった	もう少し標準語で言えばよかった
		昔の言葉って(見ていると)疲れるでしょ
	もう少し標準語で言えばよかった。自分の言った通りそのままであった	
	容量は多い方がいい	内容は多い方がいい
	色づかいがちょうどよかった	ピンクはちょっと見えづらいがこれくらいの濃いピンクでちょうどよかった
写真に名前も書いてほしい	写真をとってもらったが写真に名前をつけてほしい。忘れてしまう	
句読点を入れて読みやすくしてほしい	会話的な感じで書いているから、空間を入れて、切るところは切って書いてほしい	
他者にも見せられ、繰り返し見たい	人に見せられる内容になっている	家族の人にもみんなに見せられた
		こういうことをやってきたということを子供に見せられたし、いいと思う
自分たちの時代はこうだったんだと見せられる		
旦那にはみせられている		
繰り返し見たい内容になっている	家	家にて、出てきてみるんだよ。懐かしく思う
		出てきてみている
内容が不十分であった	内容が不十分であった	自分の人生なのに中学校の教育で終わって、他は何も冊子に書かれていなかった
		旦那が出稼ぎに何十年も行ったのが落ちていた。ただの出稼ぎとは意味合いが違ってくる
		2回目の録音内容だけで書いてあった気がする
1回だけのインタビューだったから、内容が少なかった		
宝物にしている	宝物にしている	宝物にしている

表6 学生に対してや「聞き書き」に対する要望

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
話しやすく楽しかった	嬉しかった	嬉しかった
		冊子をもって、メッセージもあって嬉しかった
	楽しかった	若い人と話するのが楽しかった
		楽しかった
雰囲気作りがよかった	皆和やかなムードだった。自分だけで盛り上がりしているだけではなく、空気が良かった	
	2回目はリラックスできた	2回目になれば、リラックスして話げできた
様々な話し良い機会になった	様々な話せた	いろいろ話した
		たくさん話した
		なんでもしゃべれた
	よい機会になった	自分のことを小さい時から思い返すことはそうないから、いい機会になった 戦後のことか、なかなか言う機会はない
冊子の内容を事前に確認させてほしい	冊子の内容を事前に確認させてほしい	中には、載せてほしいのに載っていない人もいるだろうから、事前に確認してほしい
		細かくはなくても、おおざっぱでもいいから冊子の内容を教えてほしい
		2回目に内容を確認して欲しい
		CDにするなどして、確認したらよい
		こんな感じになりますと確認してほしい
積極的に話してほしかった	もっと積極的に話してほしかった	「こういう時にこういうことしましたか？」と学生から質問して欲しかった 学生側からも聞いてと言ったが、私ばかり主に言っていた
	学生から話してくれた	結構しゃべってくれた
	学生の反応が少なかった	「うん。うん。」とか、反応が少なかった
	質問してくれればよかった	向こうから何か聞きたいことを質問してくれればよかったと感じた
学生に対して不満はない	学生に対して不満はない	今の学生はしっかりしていてよかった 学生に対しての満足感は得られた 嫌な思いはしなかった
時間配分や内容が適切であった	時間配分がちょうどよかった	ちょうどよい話の時間配分であった
	思い出せる内容であった	何を話したか忘れていたが内容を見て思い出せた
	適切な分量であった	あまり多くても見づらからこれくらいの量でよかった
冊子を見ると思い出す	冊子を見ると思い出す	写真があるため冊子を見ると学生のことを思い出すこともある 学生のことはあまり思い出さないが、話の内容は思い出す
事前に質問内容を教えてほしい	事前に質問内容を教えてほしい	聞かれる方の心の準備があるから、事前に聞きたいことを教えてほしい

7. 聞き書きが高齢者に与える効果

表7に聞き書きが高齢者に与える効果を示す。16のコードが得られ、7のサブカテゴリー、4のカテゴリーに分類された。カテゴリーはコード数が多い順に【人生の振り返りに役立つ】【肯定的感情をもった】【思い出すことは昔の記憶を引き出す】【人生の統合になる】であった。

表7 聞き書きが高齢者に与える効果

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
人生の振り返りに役立つ	人生の振り返りになる	冊子がないと昔のことがものとして残らないが、冊子があることによって人生の振り返りに役立つと思った
		自分の自叙伝のようだ 自分で書いてみようと思ってもまとめることが苦手でできなかったが、冊子がその一部分になった
	思い出すきっかけとなる	普段は自分が生きてきた時代のことを話す機会はないため、いききっかけになった 自分からはあまり話さないが、学生と話すことで思い出すきっかけになった 冊子を見返すことによって昔のことを思い出すきっかけとなる
肯定的感情をもった	嬉しさを感じた	昔の話をするのが嬉しかった
	懐かしさを感じた	昔のこと思い出して懐かしく感じた 昔のことをずーとつながって話すことはなく、昔こんなことがあったと懐かしかつた 生い立ちから話して懐かしかつた
思い出すことは昔の記憶を引き出す	思い出すことは昔の記憶を引き出す	大学生が来たおかげで、昔のこと思い出した ずーとさかのぼって話すことがないため、昔はこんなことがあったと思い出した 生い立ちからずーと記憶を引き出した
人生の統合になる	人生の統合になる	人生の統合になっていると思う

IV. 考察

1. 実習の受け入れ前後の気持ちや感じ方について

事前に実習対象者となることについては同意を得ていたが、【ポジティブな気持ち】だけではなく、【驚きの気持ち】【ネガティブな気持ち】もあった。自分が対象者になることについては、＜想像していなかった＞ため【驚きの気持ち】があったが、以前、実習対象となった＜経験者からの情報から不安はなかった＞＜緊張しなかった＞と感じていた。対象者として、＜いろいろ話したい＞と思い、＜嬉しかった＞＜楽しみだった＞と多くの高齢者が【ポジティブな気持ち】で実習を受け入れていた。【ネガティブな気持ち】は＜経験がないことによる不安があった＞＜緊張した＞と、実習の受け入れが初めてであることが理由であった。今後の課題として、臨地実習指導者を通して、事前に聞き書き冊子をサンプルとして提示する等、実習がイメージでき、不安や緊張感が軽減できるようにする必要がある。

実習の受け入れ前には、【ネガティブな気持ち】もあったが、世代の違う人から「聞き書き」を受けたことに対しては、【話せてよかった】【緊張しなかった】【性別、年齢、世代は関係ない】【気になることはあった】【嫌でなかった】

と、全ての高齢者が肯定的な気持ちであった。＜自分の昔話を聞いてもらって懐かしくよかった＞＜ありのまま好きなように話した＞＜楽しかった＞と学生のコミュニケーション技術に対して満足感が得られ、【話せてよかった】と感じていた。学生は実習目標である①高齢者の現在の思いを傾聴できる、②高齢者がこれまで歩んでこられた生活歴を通して、その人の全体を理解する姿勢を学ぶことを意識して、高齢者に関わることができていたと考える。

世代の違う人から「聞き書き」を受けたことに対する気持ちについては、【性別、年齢、世代は関係ない】【緊張しなかった】の категория が得られた。＜孫と同じ感覚で緊張しなかった＞＜2対1でよかった＞ことがその理由であった。本実習では、心理的側面の看護技術であるコミュニケーション技術の実施が中心であり、入浴介助や清拭など、身体的側面の看護ケアの実施機会はなかった。そのため、学生と高齢者の組み合わせを検討する際に、対象者が女性である場合には、学生の性別による特別な配慮の必要性は少ないものと考えられた。

【気になることはあった】については、「何を聞かれるかわからないところがあった」「ICレコーダーが気がかりなところもあった」とあった。「聞き書き」の開始時に質問内容の概要、所要時間を説明し、ICレコーダーの使用の可否について確認をとってはいたが、何が聞かれるかについて具体的でわかりやすく質問内容を説明したり、ICレコーダーを対象者の目に入らない場所に設置する等、録音が気にならないよう工夫をする必要があった。

2. 学生、「聞き書き」、冊子に関する要望

学生や「聞き書き」に関しては、【話しやすく、楽しかった】【様々話し良い機会になった】【学生に対して不満はない】【時間配分や内容が適切であった】【冊子を見ると思いつく】と、「聞き書き」の実施方法や学生の参加態度については、高齢者にとって概ね満足感が得られていた。改善に関する要望があった内容は【事前に質問内容を教えてほしい】【積極的に話してほしい】【冊子の内容を事前に確認してほしい】であった。既述のように、学生の実習を受け入れた時の気持ちでは、【ネガティブな気持ち】は＜経験がないことによる不安があった＞＜緊張した＞と、実習の受け入れが初めてであることが理由であった。未知のものに対する不安の軽減のためには、イメージづくりができるよう実習概要のみならず、「聞き書き」内容の概要についても、実習指導者を通して、事前に説明を依頼することが大事であると考えた。また、「聞き書き」時の質問内容を想定し、事前に幼少期や学生時代に使用した物品や写真などを準備していた高齢者も複数あった。【事前に質問内容を教えてほしい】の背景には、学生の興味に合わせて伝えられるよう、そして、有意義な実習となるよう高齢者の心遣いも感じられた。高齢者の主体的な参加もあった

からこそ、【冊子の内容を事前に確認してほしい】と冊子が要望通りになっているのが気になっていたことが推察された。実習対象者や家族に実習評価を行った先行研究は少ないが、訪問看護実習を受け入れている療養者と家族は、実習への要望として、実習に対する期待を挙げていた²²⁾。高齢者の要望や期待に応え、長期的に繰り返し「聞き書き」冊子を活用してもらうためにも、事前の内容確認は必要である。

【積極的に話してほしい】ことに対しては、ガイダンスにおいて、高齢者の話したい内容に焦点を当てるように指導していたことが消極性を招くことにもつながった可能性があった。実習目標①にあるように、高齢者の思いを傾聴して待つ姿勢も大切であるが、傾聴の姿勢と積極的な態度の振る舞いとは異なるということを示していく必要がある。また、「聞き書き」を行った学生の学びから、学生は方言の理解が難しいために、高齢者の話す内容の全てが理解できていなかった¹⁶⁾可能性があった。学生配置については、津軽地域の出身学生1名が配置されるよう教育的配慮をしたうえで、実習前には希望者に津軽弁を理解するための書籍の貸し出しを行っていたが¹⁶⁾、津軽地域の出身学生数の確保や事前学習にも限界があった。さらに、2年次学生では本実習が初めての実習体験であったことから、地域で生活する高齢者と会話をする機会が少なく、慣れない状況にあったことも考えられた。

冊子の活用状況は【読んだり見せたりして繰り返し活用している】【大事にしている】であった。家族に見せたい内容であったり、宝物として＜大事にしまっている＞状況であり、冊子の内容が高齢者にとって、満足感が得られるものであったと考えられた。冊子に対する意見についても、【内容が良かった】【他者にも見せられ、繰り返し見たい】【宝物にしている】とあり、サブカテゴリーにみられるように、個人情報保護され、戦争などの残酷な内容はなく、楽しい内容であり、よく書かれていると評価されていた。また、＜学生の写真や名前を載せるのはよかった＞と学生と高齢者を撮影した写真を掲載することを好まれる意見があった。実習施設のスタッフからは、高齢者は写真撮影の機会が減っているため、写真の掲載を喜ばれていることが聞かれ、冊子を【宝物にしている】【大事にしている】高齢者には、聞き書き時に写真撮影を提案してみたいことを検討したい。

一方、【読みやすく冊子を作成してほしい】【内容が不十分であった】という意見もあった。読みやすさが求められた背景には、＜津軽弁を多用しすぎず、標準語も用いてほしい＞＜句読点を入れて読みやすくしてほしい＞とあり、方言の使用により平仮名が多用されたうえ、句読点の使用が少ないため、形態素を一つずつ確認して読み進めなければならないことが推察された。高齢者が生活において最も支障をきたしているものに、新聞の文字を読む

こと²³⁾が挙げられている。本研究の対象者は全て75歳以上の後期高齢者であり、加齢に伴う視覚機能に配慮して、よみやすく冊子を作成する必要がある。また、【内容が不十分であった】では、コードから、長い人生であるのに中学校までの内容となっていたり、2回目の「聞き書き」内容だけで書かれていたこと、旦那の出稼ぎは数十年に渡り回数が多かったにもかかわらず、単年度として書かれていたこと等が不十分な内容であった。【読みやすく冊子を作成してほしい】では、「内容は多いほうがよい」という意見もあったが、高齢者が生き生きと話す内容に焦点を当てるよう指導していたため、A4サイズ8頁分(表紙, 目次, 背表紙を含む)の冊子の枚数制限があるなかで、ライフステージに沿って内容を取上げるには限界があった。本研究の対象者は認知症の診断や要介護認定を受けていない【読んだり見せたりして繰り返し活用している】元気な高齢者であったため、分量を調整する必要性もあった。

3. 聞き書きが高齢者に与える効果

高齢者自身、聞き書きの効果として感じていたのは【人生の振り返りに役立つ】【肯定的感情をもった】【思い出すことは昔の記憶を引き出す】【人生の統合になる】であった。【人生の振り返りに役立つ】【人生の統合になる】は、エリクソンの発達課題である「統合 対 絶望」²⁴⁾に類似した内容であり、高齢者にとって「聞き書き」は人生を振り返ることに役立ち、高齢者自身が【人生の統合になる】と感じ、老年期の発達課題を達成することに有意義なものであったと考えられた。

学生や「聞き書き」に関する要望には、【話しやすく、楽しかった】【様々話し良い機会になった】とあり、聞き書きが高齢者に与える効果については、<昔の話をするのが嬉しかった><昔のこと思い出して懐かしく感じた>と感じていたことが、【肯定的感情をもった】ことにつながった。増田ら¹¹⁾は高齢者施設で生活する認知症高齢者へ写真療法を実践し、自分の人生を振り返ることにつながり、自己肯定感を生む大切な機会となったと報告している。また、閉じこもり傾向にある地域在住高齢者を対象に懐メロを用いた回想法を行った研究では、心理的效果として幸福感に効果があった²⁵⁾としている。学生が行った「聞き書き」は回想法の効果として、高齢者が人生を振り返ることによって肯定的感情につながったと考えられた。

聞き書きの効果に【思い出すことは昔の記憶を引き出す】こともあった。梅本²⁶⁾らは、地域在住高齢者に対する匂いの感覚刺激を取り入れた回想法を実施し、視覚を中心とする一般的回想法と比較した結果、感覚刺激を取り入れた回想法を実施した群では、認知機能がやや低下している高齢者に改善が大きかったことから、軽度認知機能障害には、匂いを使った回想法のアプローチも有効に利用できると報告している。また、Okudaら²⁷⁾は、地域に住む閉じこもり

または認知機能に関連する問題を抱えている高齢者に懐かしい歌による回想を行った結果、軽度の認知機能障害を有する高齢者では遅延記憶が改善したとしている。さらに、水田ら²⁸⁾は、料理経験のある認知症高齢女性に料理教室を実施し、会食時に年中行事の写真やイラストを用いてグループ回想を行った結果、回を重ねるごとに場の流れや展開に関心を向ける、料理教室にかかわる記憶が保持できる等、有効であった²⁹⁾としている。匂い、音楽、料理等、用いられているものは異なるが、回想法は認知症予防にも効果があると考えられた。本研究の対象者においても、【思い出すことは昔の記憶を引き出す】と自覚し、繰り返し回を重ねて冊子を活用することにより、その効果が期待できる可能性も考えられた。

学生が実施した「聞き書き」と作成した冊子を活用することによって、高齢者には発達課題の達成や肯定的感情を引き出したり、認知症予防の可能性も期待できるものであったが、学生にとっても生活歴を振り返るきっかけとなったり、高齢者の様々な側面をプラスに捉える機会となっている¹⁶⁾。さらに、学生には高齢者に対する気遣いや思いやりの気持ちも生まれ、「聞き書き」を通して高齢者理解のための実習目標以外に副次的な効果も得られている¹⁶⁾。「聞き書き」は対象者と実施者の双方にとって、有意義な手法であると考えられた。また、松田ら³²⁾は、認知症デイケアにおいて回想法を実施し、冊子としてまとめたことが作成のために得た利用者の情報を日常のケアに生かせる可能性があり、ケアの質向上にきわめて有用であると報告している。学生のみならず、スタッフにとっても有益なものであり、実習を通して、今後、高齢者のケア現場において波及していくことを期待したい。

4. 「聞き書き」を用いた臨地実習の質改善に向けて

「聞き書き」を受けた当事者である高齢者の主観的評価の結果から、臨地実習の質改善に向けて以下のような示唆が得られた。

(1) 実習指導者への依頼

本研究の結果から、認知症の診断や要介護認定を受けていない対象者では実習の受け入れの際に不安や緊張感を軽減するため、臨地実習指導者には事前に聞き書き冊子をサンプルとして提示する等、実習がイメージできるようにする必要がある。一方、実習指導者からは認知症のある高齢者では事前情報を与えすぎると混乱してしまうといわれ、実習概要のみの事前説明にとどめてもらうよう依頼する必要がある。

(2) 学生への指導

冊子に載せたい内容については、学生と高齢者の間で焦点が異なっていることがあった。高齢者に長期的に繰り返し「聞き書き」冊子を活用してもらうためには、高齢者の希望に沿える内容となるよう、学生が事前に掲載予定の内

容を高齢者に確認したうえで冊子を作成するよう指導する必要がある。また、高齢者の要望に応えた結果、冊子の枚数制限を超えてしまう場合には、ケースに合わせて上限を調整することが可能であることを学生に伝える必要がある。さらに、加齢に伴う視覚機能の低下に配慮することは、ガイドランスでは指導していたが、読みやすく冊子を作成するよう今後も強調していく必要がある。

改善に関する要望があった内容は【積極的に話してほしかった】であった。学生にとっては初めての臨地実習であり、対象者との接し方に慣れていない可能性もあった。また、インタビューガイドに沿って話を進めるため、自然な会話ができていなかった可能性も考えられた。インタビューガイドは作成しても、高齢者との会話を楽しむことをガイドランスでは伝えていく必要がある。

V. 結語

「聞き書き」では【積極的に話してほしかった】【事前に質問内容を教えてほしい】、作成した冊子では【読みやすく冊子を作成してほしい】【内容が不十分であった】【冊子の内容を事前に確認させてほしい】と要望があり、改善が必要な点があった。しかし、コミュニケーション技術を用いて行った「聞き書き」と作成した冊子は、【話しやすく、楽しかった】【様々話し良い機会になった】【読んだり見せたりして繰り返し活用している】【大事にしている】等、実習対象の当事者である高齢者から一定の評価を得ることができた。また、認知症予防や老年期の発達課題を達成するためにも有意義なものと考えられた。

利益相反 開示すべき利益相反はありません。

謝辞 協力頂いた対象者の皆様に、心より深謝いたします。

【資料】

老年看護学実習 I について

(1) 実習目標

- ①高齢者の現在の思いを傾聴できる
- ②高齢者がこれまで歩んでこられた生活歴を通して、その人の全体を理解する姿勢を学ぶ
- ③老年期において人生を振り返ることの意義について理解を深める

(2) 実習内容

① 実習ガイドランス (1 日)

学生は実習初日に実習の概要についての説明を受けた。また、効果的なコミュニケーションスキルに関する VTR 学習を行った。

本実習では「聞き書き」を実施し、対象高齢者から聞き

取った生活歴を基に冊子を作成するため、インタビューガイドを作成した。「聞き書き」では高齢者の語りを引き出し、高齢者が話したい内容に焦点を当てるように学生は指導を受けた。また、冊子が高齢者にとって読みやすくなるよう、視覚機能の加齢変化に合わせた字の大きさ、色使い、平仮名や片仮名の使い方等に配慮したり、方言の多用を避けるよう学生は説明を受けた。

② 臨地実習 (2 日間)

学生 2~3 名が 1 グループになり、1 人の高齢者から生活歴を聴取した。インタビューガイドを参考に、高齢者が話したい内容に焦点を絞った。学生はインタビューに先立ち、高齢者にインタビューの目的及び方法を説明した。また、冊子を作成するため、高齢者の発言内容についてフィールドノートへの記録及び IC レコーダーへの録音を依頼し、同意を得た。

(3) 中間学内実習 (1 日)

臨地実習 1 回目の終了後、2 回目の臨地実習前に学内実習を 1 日行った。1 回目の臨地実習において聴取したインタビューの内容をフィールドノートおよび電子ファイルに整理した。録音が可能であった場合はその内容を整理した。また、再確認が必要な内容を整理して、2 回目のインタビューに臨んだ。

(4) 実習のまとめ (半日)

実習の最終日には、聞き書きを用いた高齢者へのインタビューを通して、高齢者理解において学んだことについて、まとめの発表会を行った。各学生が個人の学びについて、口頭発表を行い、全体で学びを共有した。

(5) 聞き書き冊子の作成 (1 日)

臨地実習 1 回目及び 2 回目の終了後にはグループごとに、インタビューを通して聞き取った高齢者の話をできるだけ「話し言葉」にして、時系列、あるいは、話した内容に沿って、カテゴリーに分類し、生活歴がわかるようまとめ、A4 サイズ 8 頁分 (表紙、目次、背表紙を含む) の聞き書き冊子を作成した。聞き書き冊子は終了後、高齢者に提供し、自由に活用してもらった。

引用文献

- 1) 堀内成子, 太田喜久子, 他: 看護ケアの質を評価する尺度開発に関する研究—信頼性・妥当性の検討—. 日本看護科学会誌, 16(3): 30-39, 1996.
- 2) 井川由貴: 急性期病院の看護サービスの質評価における NURSERV-J の信頼性・妥当性の検討. 日本看護科学会誌, 33(3): 56-65, 2013.
- 3) 早瀬良, 坂田桐子, 他: 患者満足度を規定する要因の検討. 実験社会心理学研究, 52(2): 104-115, 2013.
- 4) Haruka Otsu, Hiroko Yokotani, et al.: Development of Nursing Protocol for Preventing Interruptions during Clinical Examinations and Treatments in the Early Days of Hospitalization for Acute

- Exacerbation of Chronic Heart Failure in Patients with Impaired Cognitive Function. *Health*, 10(6): 773-788, 2018.
- 5) Haruka Otsu, Shiori Fujimoto, et al.: Development of Nursing Protocol for Preventing Discontinuation of Treatments by Methods Other than Physical Restraint during Acute Exacerbation of Chronic Heart Failure in Patients with Impaired Cognitive Function. *Health*, 10(6): 789-815, 2018.
 - 6) Haruka Otsu, Tsukiko Narasaki, et al.: Developing a nursing protocol for hospitalized patients with reduced cognitive function in the process of recovery from acute exacerbation of chronic heart failure. *Health*, 10(7): 879-901, 2018.
 - 7) 深田順子, 北池正, 他: 訪問看護における摂食・嚥下障害看護の質評価指標改訂版の妥当性と信頼性の検討. *日本看護科学会誌*, 30(1): 80-90, 2010.
 - 8) 山上徹也: 認知症のリハビリテーションのアウトカムとその評価尺度. *MEDICAL REHABILITATION*, 164: 9-15, 2013.
 - 9) 渡辺陽子, 高山成子: 施設で生活する中等度・重度認知症高齢者の自己決定の機会を提供する看護介入の効果. *老年看護学*, 14(1): 5-14, 2010.
 - 10) 渡辺陽子: 高齢者施設で生活する中等度・重度認知症高齢者に自己決定の機会を提供する看護介入の有効性についての検討. *人間と科学 県立広島大学保健福祉学部誌*, 11(1): 29-40, 2011.
 - 11) 増田雄太, 荻野朋子: 高齢者施設で生活する認知症高齢者への写真療法の実践. *中京学院大学看護学部紀要*, 6(1): 37-48, 2016.
 - 12) 一般社団法人日本看護質評価改善機構: 看護ケアの質評価・改善システムマニュアル 2017 年度 Version. nursing-qi.com/common/pdf/manual_2017.pdf (2019-04-10)
 - 13) 石川佳彦, 小倉慎子, 他: 入院している当事者が安らげる環境作りの取り組み 精神科病棟のリノベーションを試みて. *日本精神科看護学術集会誌*, 59(2): 8-12, 2017.
 - 14) 吉川陽子, 秋山直美, 他: 当事者の声を取り入れた防災手帳作成の取り組み. *日本精神科看護学術集会誌*, 59(2): 92-96, 2017.
 - 15) 浅野敬子, 中島聡美, 他: 急性期性暴力被害者のための支援情報ハンドブックの有用性評価. *女性心身医学*, 21(3): 325-335, 2017.
 - 16) 駒谷なつみ, 大津美香, 他: 高齢者への聞き書きを通して看護学生が学んだこと. *保健科学研究*, 8(1): 33-40, 2017.
 - 17) 川久保悦子, 井本由希子, 他: 老年看護学実習における学生が行うアクティビティケアの学び —「アクティビティケア計画用紙」と「アクティビティケア評価用紙」を用いた現状分析—. *群馬パース大学紀要*, 22: 11-22, 2017.
 - 18) 西村直子, 前田恵利: 老年看護学実習に毎日繰り返し行うフィジカルアセスメントを導入した学生の学び. *川崎医療福祉学会誌*, 27(2): 535-544, 2018.
 - 19) 堂下陽子, 山崎不二子: 精神障害者社会復帰施設を利用する当事者が看護学実習に参加することの意味と教育上の課題 当事者および臨床指導者からの実習評価と学生の学びを踏まえた検討. *長崎県看護学会誌*, 5(1): 27-35, 2008.
 - 20) 小田豊二: 「聞き書き」をはじめよう. 1-110, 木星舎, 福岡, 2012.
 - 21) 大津美香, 工藤悠生. 学生ボランティアの「聞き書き」が認知機能の低下した高齢者の心理面に与える影響. *日本看護研究学会雑誌*, 41(3): 518, 2018.
 - 22) 小笠原映子, 牛久保美津子, 他: 在宅療養者と家族における訪問看護実習協力の現状と認識. *群馬保健学紀要*, 35: 53-60, 2015.
 - 23) 川口順子, 庄山茂子, 他: 高齢者の生活環境における色彩弁別能力および視力の影響. *人間と生活環境*, 12(1): 21-26, 2005.
 - 24) エリクソン EH・エリクソン JM・キヴニク HQ. 村瀬孝雄・近藤邦夫. *ライフサイクル*, その完結. 増補版, 71-86, みすず書房, 東京, 2001.
 - 25) 奥田淳, 橋本顕子, 他: 閉じこもり傾向にある地域在住高齢者への心理ケアに関する研究 懐メロを用いた回想法による介入の評価. *日本看護研究学会雑誌*, 40(1): 15-24, 2017.
 - 26) 梅本充子, 柴田悦代, 他: 地域在住高齢者に対する匂いを使った回想法の有効性(第2報) 匂いを使った回想法と一般的回想法の群間比較. *日本早期認知症学会誌*, 10(2): 105-112, 2017.
 - 27) Jun Okuda, Akiko Hashimoto, et al.: Effects of reminiscence therapy using nostalgic songs on the cognitive function of elderly living in the community. *Journal of Nara Medical Association*, 68: 13-22, 2017.
 - 28) 水田光香, 山本めぐみ: 認知症高齢者女性を対象としたグループ回想法の活用 季節感を取り入れた料理教室を通して見られた変化. *日本精神科看護学術集会誌*, 59(1): 134-135, 2016.
 - 29) 松田ヒトミ, 細見潤: 回想法における聞き書きボランティア導入の試み 個人史の冊子作成とスタッフの意識の変化について(第1報). *認知症ケア事例ジャーナル*, 3(4): 364-370, 2011.

【Report】

Evaluation of practical training by the elderly persons who participated in “hearing and writing down”

HARUKA OTSU^{*1} NAMI KUROSAKA^{*2} NARUMI SUGAWARA^{*3}
NATSUKI SUTO^{*4} YU KITAJIMA^{*1} CHIKAKO YONAIYAMA^{*1} MOTOYA
YAMADA^{*1} NOBUKO INOUE^{*5} NAOKO SHINPO^{*5} RURIKO KIDACHI^{*1}

(Received April 16, 2019 ; Accepted July 10, 2019)

Abstract: The purpose of this study was to obtain suggestions for improving the quality of practical training from the subjective evaluation of subjects who participated in nursing students' practical training using "hearing and writing down" by the students. Group interviews were conducted by dividing the 16 target elderly people into 4 groups at a time according to the practical training period. The contents of the statement were converted into texts, and classified into categories. Results showed that the categories of "speaking proactively" and "knowing the contents of questions in advance" were obtained through the students' interviews. With regard to the booklet created, there were requests "to make the booklet easy to read", "for enough content", and "to confirm the content of the booklet in advance", and improvement was required. However, certain evaluations were obtained from the elderly people who were the targets of the practical training. These included: "It was easy to talk; it was fun", "It was a good opportunity to talk about various things", "Reading, showing and using (the booklet) were useful", and "Being able to keep the contents in mind was helpful". In addition, "hearing and writing down" was considered to be significant in preventing dementia and achieving a solution to the developmental problems of the old age.

Keywords: Hearing and writing down, Subject themselves, Subjective evaluation, Nursing students, Practical training